

海の未来をひらく！
女性ネットワークからの発信

vol. 01

海の女性ネットワーク



もくじ



はじめに	2
海の女性ネットワークのはじまり	3
窪川かおる	
海とはじめての女性 (1)	7
横山美和	
男女共同参画の今 (1)	10
大坪久子	
海と私	12
阿見彌典子	12
大塚万紗子	13
瀧澤美奈子	15
田熊文香	16
徳永佳奈恵	19
中村真由子	21
安中さやか	23
松本さゆり	24
西川はつみ	26
大越まりあ	27
編集後記・次号予告	28



はじめに

日本は海に囲まれた国です。海を知り、海を学び、海を身近に感じる機会は少なくありません。しかし、海の仕事や研究の多くはよく知られておらず、そこで働く女性は多くありません。海の仕事女子中高生・大学生に紹介する目的で、のべ25名の女性が執筆した2冊の本をしばらく前に出版しました。切磋琢磨しながら日常を生き生きと過ごしている女性達に、読者から多くの称賛が寄せられました。でも、海の実業分野への女性進出に対するわずかな1滴は、まだ続ける必要があります。海に関わる分野、海洋科学・海洋工学・水産学などでは未だに女性はごく少数です。

海に関わる多様な職場で女性が働いています。海洋学・水産学を専攻する女子学生も増えています。また、学協会や省庁でも女性役員や女性委員は当たり前です。これらの人数増加は嬉しいことですが、責任も増えていきます。家庭と仕事の両立は相変わらず難問であり、仕事や学業に精一杯努力しつつ、さらに頑張らなければなりません。しかも海に関する分野では、孤軍奮闘の女性が少なからずいる状態です。支え合う必要があります。

一方、海の研究は、自然科学から社会科学まで広範囲にわたり、さらにそれらを統合する広い視野が特徴です。これには、様々な分野の研究や職種の人々が繋がり、議論を重ね、知の統合を図り、社会に発信するプロセスが必要です。

そこで、一人ひとりの女性を大事にしつつ、多様だけれどコンパクトで、海の仕事と研究を推進しつつ社会に発信する機動性のある活動を始めましょう。それが海の女性ネットワークです。

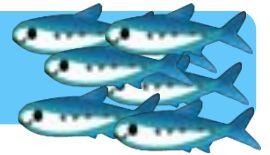
本紙は、誕生したばかりの女性ネットワーク参加者の多大な協力があって、原稿が速やかに集まり2018年3月20日の発行に至りました。さすがは海の女性！どんな荒波も超えて来たに違いありません。本紙の構成は次のようになります。「海の女性ネットワークのはじまり」で海の女性ネットワーク立上げの背景説明。横山美和氏の「海とはじめての女性」の招待論文。大坪久子氏の最先端の男女共同参画の話題提供。これら2報は連載になります。最後はネットワーク参加者の手記となる「海と私」です。海と私たちとの深い繋がりを多様な視点で学ぶことができます。すでに原稿は第2号、第3号分も集まっています。是非楽しみになさってください。

なお、ホームページも近々開設します。今後も海と女性ネットワークを見守っていただけますよう心からお願い申し上げます。

海の女性ネットワーク 編者
窪川かおる

本紙は2017年度東京大学海洋アライアンス・イニシアティブの事業により作成しました。

海の女性ネットワークのはじまり



海の未来をひらく！女性ネットワークからの発信

窪川かおる

東京大学 海洋アライアンス 海洋教育促進研究センター

はじめに

男女共同参画基本計画（平成 11 年）が施行されてすでに 18 年が経つ。女性が仕事を継続し、活躍するための様々な取組みが産官学で推進されてきた。最近、「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」（平成 27 年）が施行されて女性の活躍を後押ししている。今では仕事と育児・介護を両立させている女性も多くなった。では、海の仕事での男女共同参画はどうだろうか。女性がいる職場は、少人数であっても急速に増えている。女性リーダー育成やキャリアアップも進められている。そこで、2017 年度東京大学海洋アライアンス・イニシアティブの支援をいただき、海の女性たちの情報交流と活躍を応援するために、海の女性ネットワークを構築する準備を始めた。まず、海に出た女性の昔話から始めよう。

最初の女性

19 世紀初頭、ウッズホール海洋生物学研究所は女性を積極的に受け入れ、海洋生物学のバイオニアを育成した（図 1）。日本女性では津田梅子が一時期滞在している。

初めての女性は、18 世紀後半、フランス海軍の世界周航に男装して乗船したジャンヌ・バレである。彼女について研究したお茶の水女子大学横山美和研究員によれば、豊富な知識をもつ彼女は植物学者の助手として乗船した勇気ある女性で、それから 250 年を経た今日、女性たちは、男性とともに、海洋学を研究し、海の仕事をし、航海にも出ている。



図 1. ウッズホールの採集船で。1980 年代。

A collecting trip on "Vigilant" about to leave Woods Hole. 1890' s. From the Baldwin Coolidge Collection. Woods Hole Historical Museum.

<http://woodsholemuseum.org/wordpress/in-the-lab-and-out-collecting/>

海上保安庁における過去10年の女性職員数の推移

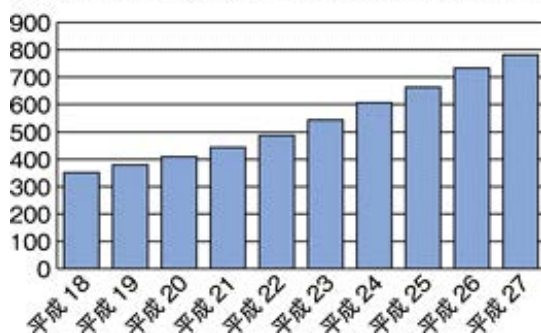


図 2. 海上保安庁における過去 10 年の助成職員数の推移。「共同 参画」平成 27 年 12 月号 p. 12-13（内閣府）

海上保安庁では、女性海上保安官が2014年後半で約800名(約6%)に増え、子育てをしながらの保安官も増えている。内航船と外航船の女性船員も増えている。海洋研究開発機構、深海探査艇「しんかい6500」では女性コパイロットが潜水作業を担っている。さまざまな職場で、女性の採用や昇進は増えており、女性が活躍する機会が拡大している。

欧米の女性海洋研究・技術者

海洋学の国際誌 Oceanography の2005年18巻1号は、“Special Issue: Women in Oceanography”であった(注3)。10年後の2014年には、“Supplement, Women in Oceanography: A Decade Later”が発行された(注4)。両誌とも、100人の世界の女性海洋研究者の活躍が、自身により紹介されている。その生き生きとした仕事ぶりや充実した生活から、海洋学の魅力が伝わってくる。両誌はまた欧米での男女共同参画の状況を報告している。アメリカでは、海洋関係で学位を取得する女子学生が、毎年、男子学生とほぼ同じ数にのぼる。しかし地球科学全体の教授職の女性比率は2014年に21%であり、継続して女性活躍の旗を掲げる必要性が説かれている。

日本の科学技術分野の女性研究者

日本ではどうだろう。科学技術分野の研究職の女性比率は、理学14.1%、工学10%、農学20.8%である(図4)。海洋に限ればさらに低くなる。数字はないが、海洋関連の研究集会を見れば一目瞭然であろう。海洋を含む大きな学会の会員の女性比率は、地球惑星科学連合15%、水産学会12%(男女共同参画学協会連絡会調査、2013)であり、学生も研究者も女性は増えたと言われるが、数字をみると欧米よりずっと少ない。

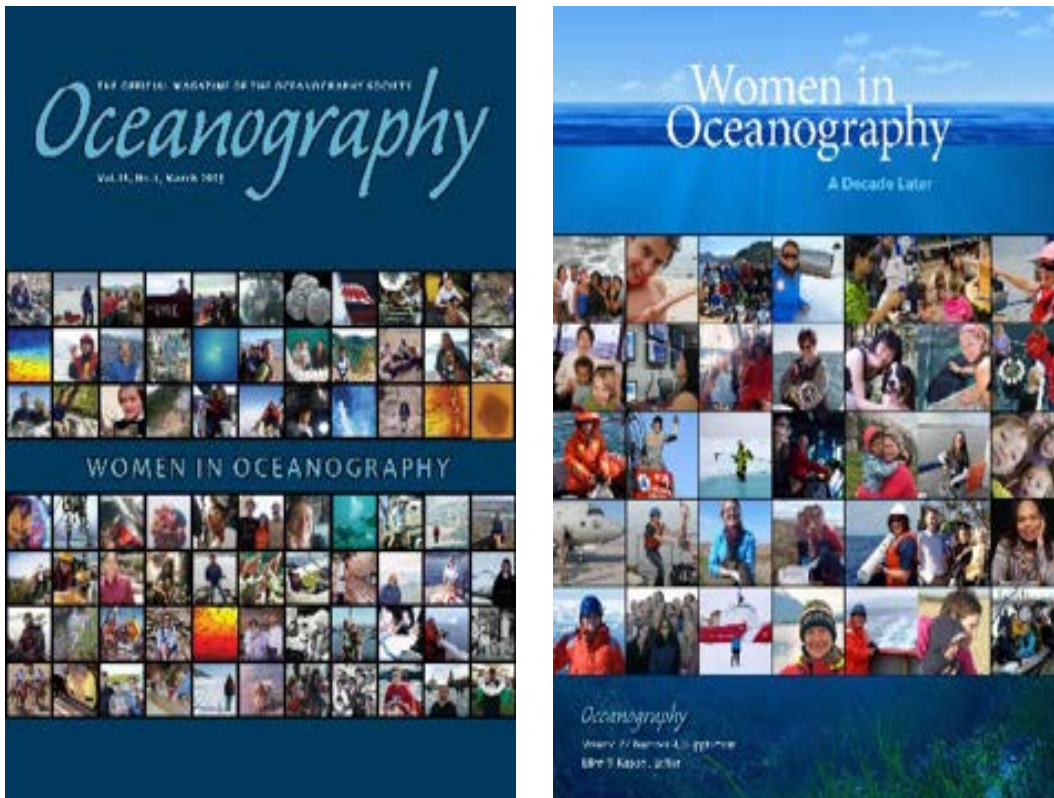


図3. Oceanography 表紙.

(左) Oceanography 18 (1), <http://tos.org/oceanography/issue/volume-18-issue-01>. 2005.

(右) Oceanography 27 (4) suppl. <http://tos.org/oceanography/issue/volume-27-issue-04-supplement>. 2014.

女性活躍を掲げる基本計画

大学・研究機関では、科学技術分野の女性比率を上げる方策を積極的に立て、関係省庁も助成制度を設けるなどで支援している。第4次男女共同参画基本計画（平成27年）「第5分野 科学技術・学術における男女共同参画の推進」では、女性登用推進、継続して活動の最前線で活躍できるためのアクション、次代を担う女性の育成などを掲げている。第5期科学技術基本計画（平成28年）の「女性の活躍促進」には、女性リーダーの育成・登用等を通じての女性の活躍促進、女性研究者の新規採用割合の増加（自然科学系全体で30%が目標）、次代をになう女性の拡大のための施策を講じることが明記されている。5年間の目標に向けて、産官学が連携して女性活躍に取り組もうとしている。対する女性も、それに応える必要がある。

海洋基本計画

海洋基本法（平成19年）に基づき5年ごとに改訂される海洋基本計画（平成25年）に女性の活躍が記されているのは、水産業における「海洋・海事・水産の分野への女性の参画の促進」である。水産業での女性の活躍だけなのである。海洋は、海事、海洋科学、海洋工学、水産業など広い分野にわたっているので、女性の活躍促進は広い分野で期待されてしかるべきであろう。人材育成に関しても、女子への海洋教育の重要性を認識し、海に興味を持ち、キャリア形成にもつながる方向が示されてよかった。海洋基本計画は平成30年度に次期基本計画が施行される予定であり、現在改訂作業が進められている。次期には、女性活躍と女子への海洋教育などの内容が盛り込まれることを期待したい。それには海に関わる女性たちから意見を出していくことも必要である。

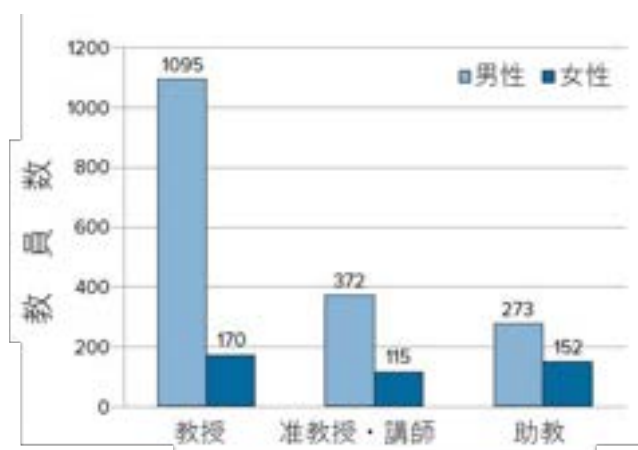


図4. アメリカ106大学の地球科学分野での教員・研究員の女性数（2010-2011）図6を改変。O'Connell, S. 2014. Women of the Academy and the Sea: 2000-2014. Oceanography 27 (4) supplement: 15-22, <https://doi.org/10.5670/oceanog.2014.106>.



図5. 専攻分野別に見た大学等の研究本務者の男女別割合（平成27年）。「男女共同参画白書 平成28年度版」（内閣府）

海洋分野に女性が増えるメリット

とくに女性が増える必要性があるのだろうか。男性が多い職場のままでも問題はなく、特段のアクションを起こす必要はないという考えもある。女性が増えるメリットと男性が多い理由を海洋学の女性研究者から集めてみた。

■女性が増えるメリットは何か。

- 1) 職場が自然な環境になり、男女共に同等の機会は、豊かな社会につながる。
- 2) 安全性の高い職場、柔軟な雇用体系や業務体系、効率的な業務遂行につながる。
- 3) 多様性は、単一性の組織・社会よりも幅広いリスクの察知・予知ができ、適応力が高まる。
- 4) 次世代育成に多様な観点の広がりがある。

■男性が多い理由は何か。

- 1) 海洋は理系分野の一部と捉えると、数学や物理が苦手な女性が多い。
- 2) 漁業、造船、船舶、物流などは体力を必要とし危険を伴うイメージがある。
- 3) 雇用者からみた場合には、結婚と出産後の退職のリスクがある。
- 4) 安全環境的観点（HSE）から、危険度が高い。改善のための方策が少ない。

社会一般的な男女共同参画に関わる課題のほかに海洋に関わる特有の課題もある。課題の解決のためには、まず課題を共有し、次に解決に向けた議論を開始し、そして解決策を見出したら、最後にそれを実行することである。しかし、1人でも大人数でも実行は難しい。そこで、繋がりを作る「海の女性ネットワーク」の出番がある。

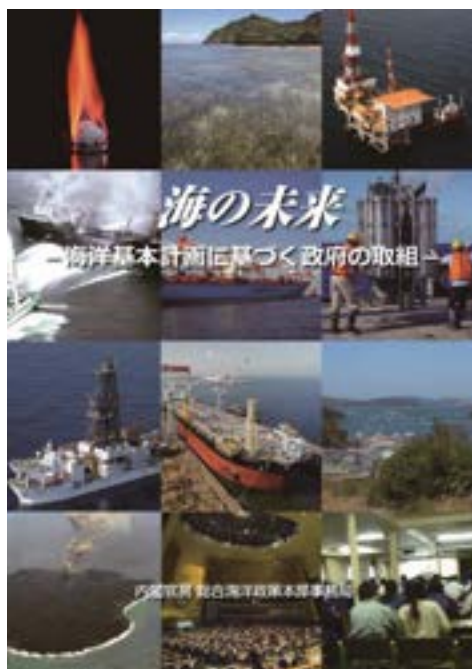


図 6. 青少年向けパンフレット「海の未来—海洋基本計画に基づく政府の取組—」表紙（首相官邸ホームページ）
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kaiyou/youth_kihonkeikaku/index.html

SDGs と男女共同参画

SDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）とは、国連サミットで採択された国際目標で、2016年から2030年まで世界の国々が目指す17のゴールが設定されている。SDG5は「ジェンダー平等を実現しよう」、SDG14は「海の豊かさを守ろう」である（図7）。このSDGsをどのように実現していくかを世界の女性たちは考えている。たとえば、2017年5月25日、26日にジェンダーサミット10が一橋講堂で開催され、23か国から600人近い参加があった。BRIDGE（多様性と男女共同参画を懸け橋とする研究とイノベーションのさらなる発展）と題した提言では、ジェンダー平等の重要性、17のSDGs（持続可能な開発目標）との関連性、社会の多様性の重要性を掲げている。詳細は、ジェンダーサミット10速報を見て欲しい。

SDG14の海洋分野でも、その目標達成に、男女共同参画と多様性を考えることは大切である。

海の女性ネットワークからの発信

以上のように、国内外で進められている男女共同参画、地球と海洋の持続可能な未来に向けた活動、さまざまな要因が「海の女性ネットワーク」開始の背景にある。2017年5月15日に東京大学でそのキックオフミーティングを開催し、海洋研究者、水産研究者、サイエンスライターほかの女性10人がスウェーデンからのテレビ会議参加を含めて集まった。少しずつ賛同者が増えているところである。

将来の目標は、海洋関連分野に、女性が働きやすい職場を実現し、男女を問わず多様な働き方を実現することである。それにより女性活躍の場が広がれば、就学・就業の選択が広がり、小中高校生が海の仕事への夢を抱き、次世代育成および国民の海の理解の増進にもつながる。遠い道のりでも理想を持つことは大事だが、発信することはもっと大切である。

まずは、今年の秋までに、海洋基本計画改訂に対して、情報の整理と意見集約とをしているところであり、暫定であるが、

- 1) 海事産業や水産業および海洋研究での女性比率の増加と女性の活躍への期待
 - 2) 女性参画推進への育児休暇や再雇用などの職場環境の整備
 - 3) 女性リーダーの育成支援
 - 4) 女子小中高生に海の魅力を伝える方策
- などを発信していきたい。



図7. SDGsの17項目とロゴ。「持続可能な開発のための2030アジェンダ」平成29年5月25日（外務省）
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/doukou/page23_000779.html

説明と出典

東京大学海洋アライアンス2017年度前期イニシャティブ「海洋分野で活躍する女性のネットワーク構築のための調査研究－女性の力を海に活かすために－」の活動で、「第12回東京大学の海研究：社会への提言」（2017年7月18日、東京大学農学部弥生講堂）において「海の未来をひらく！女性ネットワークからの発信」の発表をしました。掲載原稿は、その発表要旨を改訂したものです。この発表では、海の女性ネットワークを始めた理由などの背景説明をしました。発表要旨は、次のURLからダウンロードしてご覧いただけます。<https://www.oa.u-tokyo.ac.jp/activity/2017/07/004649.html>（2018年3月10日閲覧）



はじめての女性(1)

海の仕事や研究と言えば、船や漁業など、体力が必要で危険を伴う職業が思い浮かびます。そのような世界に乗り出した「初めての女性」を、横山美和氏にご執筆いただきました。連載します。

女性と海

-海にまつわるパイオニアの研究者たち-

お茶の水女子大学 基幹研究院リサーチフェロー 横山美和

1. はじめに

大海原へ出る仕事は長らく「男性の領域」であるとされてきた。洋の東西を問わず女性が船に乗ることは海を怒らせるとされ、タブーとされていた。許されていたのは、女性をかたどった船首像だけであった。最近の海事史の研究では、士官の夫について船に乗った女性たちや、海賊や兵士として自主的に船に乗り込んだ女性たちもいたことも明らかになってはいるが(石田, 2009)、ごく少数のことであった。とりわけ、女性が航海の必要な科学研究に乗り出すことは、20世紀半ばまで基本的に不可能であった。

集団としての女性が本格的に科学研究に参入することが可能になったのは、欧米においても19世紀後半からである。18世紀ヨーロッパにおいては、一般に身分の高い女性のみが家庭教師から私的に高い教育を受けることができた。世界に先駆けて女子高等教育が興隆した米国においては、1860年代から男性と同等のアカデミックな教育を施す女子大学が登場した。さらには、1870年代からは女性も博士号取得が現実のものとなり、女性が本格的に自然科学を学び研究者となる道が整いつつあった(Rossiter, 1982; 坂本, 2000)。それに加えて、女性が自然科学を探究する場は大学の外にも作られていた。民間の有識者が設立した研究所である。その一つに、現代では世界的に有名なウッズホール海洋生物学研究所がある。チャールズ・ダーウィンの進化論の発表後、その説を裏付けるために欧米では海洋生物の研究が盛んとなり、様々な臨海研究所が設立された。女性たちはしばらく航海の必要な研究は困難であったが、そうした臨海研究所の近くで生物を採集するなどして研究を行うことはできた。1888年設立のウッズホール海洋生物学研究所は、多くの研究者や教員の研修や研究の場となっており、初期は実にその3分の1が女性であった。女性は男性と全く同じ条件で受け入れられ、学位授与機構ではなかったものの、上位の学位取得のための研究をすることも可能であった。それというのも、ウッズホール海洋生物学研究所は、ボストンの女性教育協会から資金供与を受けており、女性の教育の場としても機能するように方向づけられた研究所だったからである(The Marine Biological Laboratory, n.d.)。海洋生物学が花開いた時期、ウッズホールに集った女性たちは、パイオニア女性海洋生物学者といえるであろう。

本稿では、海と女性研究者について考察するために、初めて世界周航し科学研究をした女性と、19世紀後半にウッズホールに集った興味深い女性たちを紹介する。その後、海洋における女性研究者の意味を考察したい。

2. 女性初の世界周航者ジャンヌ・バレ

女性が調査のために長い航海に出ることが不可能だった時代、ジャンヌ・バレ(Jeanne Baret [Barret, Baréと綴ることも] 1740-1807)¹は、女性として初めて世界周航したことで知られる。バレはフランスのブルゴーニュの村で、貧しい日雇い農民の子として生まれた。この時代、ほとんどの人々が生まれた地域から離

れることがなかったが、バレはマゼラン海峡やタヒチなど、生誕した場所からはるか遠くの世界の様々な地域に赴いた。それというのも、著名な博物学者で医師のフィリベール・コメルソン (Philibert Commerson 1727-1773) の航海に「男として」同伴していったからである。コメルソンはフランス王立海軍の世界周航時の植物学者として乗り込み、多数の植物の研究をしたことで今日でも名高い。コメルソンが危険を冒してまでバレを同伴させた理由はよくわかっていないが、何よりバレの植物の知識の豊富さから、コメルソンは植物学のよきパートナーとして彼女を信頼していた可能性が高い。

労働者階級の人々の識字率が極めて低かった時代に、バレは珍しく読み書きをすることができた。過去には、コメルソンがバレに教育をしたとされることもあったが、伝記作家のリドリーによれば (Ridley, 2010)、母親がフランスのプロテスタントであるユグノーの祖先を持つことが深く関係しているとする。プロテスタントは聖書を自分たちで読むために教育を重視しており、カトリック教徒に比べ高い識字率であった。つまり、母親が娘に読み書きを教えた可能性が高い。そして、バレは多くの女性農民が行っていたように、薬草売り (herb woman) として細々と収入を得ていた。フランスの地方の女性農民たちは代々口承される植物の知識を持っており、当時、男性の薬種商や医師、植物学者らに薬草などの植物を提供していたのは彼女たちであった。

バレの住む村の近くのトゥールン＝シュル＝アルーで暮らしていたコメルソンは、そうした薬草売りの女性たちから、植物と一緒にその知識も買い求めている。16世紀からあるジョークに、植物学者が食事に出されたサラダに使われている植物の名もわからない、というものがあつた。そのように本で得た知識しかない植物学者が多く、民衆を見下す学者も多い中、コメルソンは土着の知識を積極的に収集した。おそらくその過程で、若く、生きた知識が豊富なバレに出会ったのだろう。コメルソンは出産で妻を早くに亡くした後、バレと恋仲となった。

バレを連れパリへ赴いたコメルソンは、1766年、世界一周を目指すフランス海軍の航海船エトワール号へ植物学者として乗り込むこととなった。エトワール号は、途中フランスの数学者で航海者・軍人であるルイ・アントワヌ・ド・ブーガンヴィル (Louis Antoine de Bougainville 1729-1811)²率いるブードゥーズ号と合流した。当時フランスは、イギリスなど他の帝国と有用な植物の研究・収集を競っており、調査航海は国家にとって重要な仕事であった。この航海は、史上初めて専門の学者を同行させた航海だとも言われている (奥, 2014; Knapp, 2013)。バレとコメルソンの載った船は大西洋からマゼラン海峡を通過し、太平洋のポリネシア諸島からメラネシア諸島を調査した。途中、タヒチ諸島、サモア諸島、ニューヘブリディーズ諸島、ソロモン諸島、ビスマーク諸島、マルク諸島、バタビアを経て、1769年にフランスに戻っている (奥, 2014)。

フランス王立海軍には短時間の訪問以外は女性を船に乗せてはならないという規則があつたが、コメルソンは、その禁を犯してまでバレを付き人として同伴させた。バレは、「ジャン」という名で、300人以上の男性ばかりの船団に男装して乗り込んでいた。海に出る女性が男装したという話はしばしばみられ、17世紀の末ごろには、アイルランド出身のアン・ボニーやイギリス出身メアリ・リードといった男装の女海賊がいたことが知られている。また1750年には、イギリスの海兵隊で男装して活躍したハンナ・スネルの自伝が出されている (Knapp, 2013)。バレやコメルソンがそうした話題を知っていたかどうかは定かではない。

バレはリネンを胸にきつく巻き男性の服を着て、1年以上女性とばれずにいたという。当然のことながら、男にしては小柄なバレに乗組員は疑いの目を向けたが、自分は東洋の宦官のように去勢されたとうそぶいて、それ以上の追及をかわした。しかし、タヒチに着いたとき、現地の住民がバレを取り囲んで「女の子、女の子」と囁し立てたことによって、女性であることが発覚した。コメルソンは、罰則を逃れるため

に、彼女の本当の性別について知らぬ存ぜぬを通すしかなかった。

植物の造詣が深いバレは、植物学者の助手として何千もの植物の採集を行った。熱帯のうだるような暑さ、あるいは標高の高い場所の凍える氷雪、虫、獣、へビ、土砂降りの雨などに遭遇する、厳しい環境に分け入った。しかし、彼女の科学に対する貢献は近年まで知られることはなかった。コメルソンは、ある植物の属に彼女の名をとって「バレティア」と命名した。その植物は、まるで航海中のバレのように雌雄が曖昧であるという特徴があった。しかし、残念ながらすでに他の名前が付けられていたため、その名が歴史に残ることはなかった。コメルソンの名は70以上もの植物に残っているのにも関わらずバレの名が現代まで残っていないことは、近年まで惜しまれてきた。しかし、つい最近、エクアドルで見つかったナス属の新しい種に、バレの名をとって *Solanum baretiae* と命名されたことは (Knapp, 2013)、喜ばしいことではないだろうか。(次号に続く)



19世紀に描かれたジャンヌ・バレ

“MAD. LLA. Bare.” Artist unknown. Call no. 980/CO1/22A2 v. 2.
The State Library of New South Wales 所蔵.

【注】

1. バレについての伝記的事項は、Ridely (2010)、シービンガー (2007) を参照。
2. この航海で「発見」された花の名には、ブーガンヴィルの名前をとってブーゲンビリアと名付けられた。

【参考文献】

- 石田依子 2009 「女性海賊史序説～18世紀カリブ海の世界におけるジェンダー研究～」『海事交通研究 (年報)』第58号、1-12頁。山縣記念財団 HP http://www.ymf.or.jp/wp-content/uploads/58_9.pdf (2014年8月15日閲覧)
- 奥正敬 2014 「ブーガンヴィルが航海に初めて学者を帯同させた話」京都外国語大学図書・京都外国語短期大学附属図書館『GAIDAI BIBLIOTHECA (図書館報)』第205号、14-15頁。
<http://www.kufs.ac.jp/toshokan/bibl/bibl205/pdf/205-14.pdf>, <http://www.kufs.ac.jp/toshokan/bibl/bibl205/pdf/205-15.pdf> (2015年7月16日閲覧)
- Knapp, Sandra. 2013. Jeanne Baret: Around the World 250 Years Ago, Dressed as a Boy! The Biodiversity Heritage Library. <http://blog.biodiversitylibrary.org/> (2015年7月17日閲覧)
- Rossiter, Margaret W. 1982. *Women Scientists in America: Struggles and Strategies to 1940*. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press.
- Ridley, Glynis. 2010. *The Discovery of Jeanne Baret: A Story of Science, the High Seas, and the First Woman to Circumnavigate the Globe*. Reprint ed. Broadway Books.
- 坂本辰朗 2000 「第2章 津田梅子と女性の高等教育第一世代たち— 一九世紀末のアメリカ合衆国における女性の高等教育支援運動」飯野正子・亀田帛子・高橋裕子編『津田梅子を支えた人々』有斐閣、27-47頁。
- The Marine Biological Laboratory, n.d. “Cornelia M. Clapp (1849-1934).” http://hermes.mbl.edu/publications/women_clapp.html (2014年9月26日閲覧)
- , n.d. “Ida H. Hyde (1857-1945).” http://hermes.mbl.edu/publications/women_hyde.html (2014年9月20日閲覧)
- , 1891. The Fourth Annual Report for the Year 1891. Google Books, <http://www.books.google.com> (2014年9月26日閲覧)
- , n.d. “Women of Science.” http://hermes.mbl.edu/publications/women_index.html (2014年9月26日閲覧)

筆者紹介 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻修了。科学史・医学史をジェンダー視点で研究しています。父親が船員でしたので、海の女性ネットワークと関わらせていただき、不思議な縁を感じています。(横山美和)

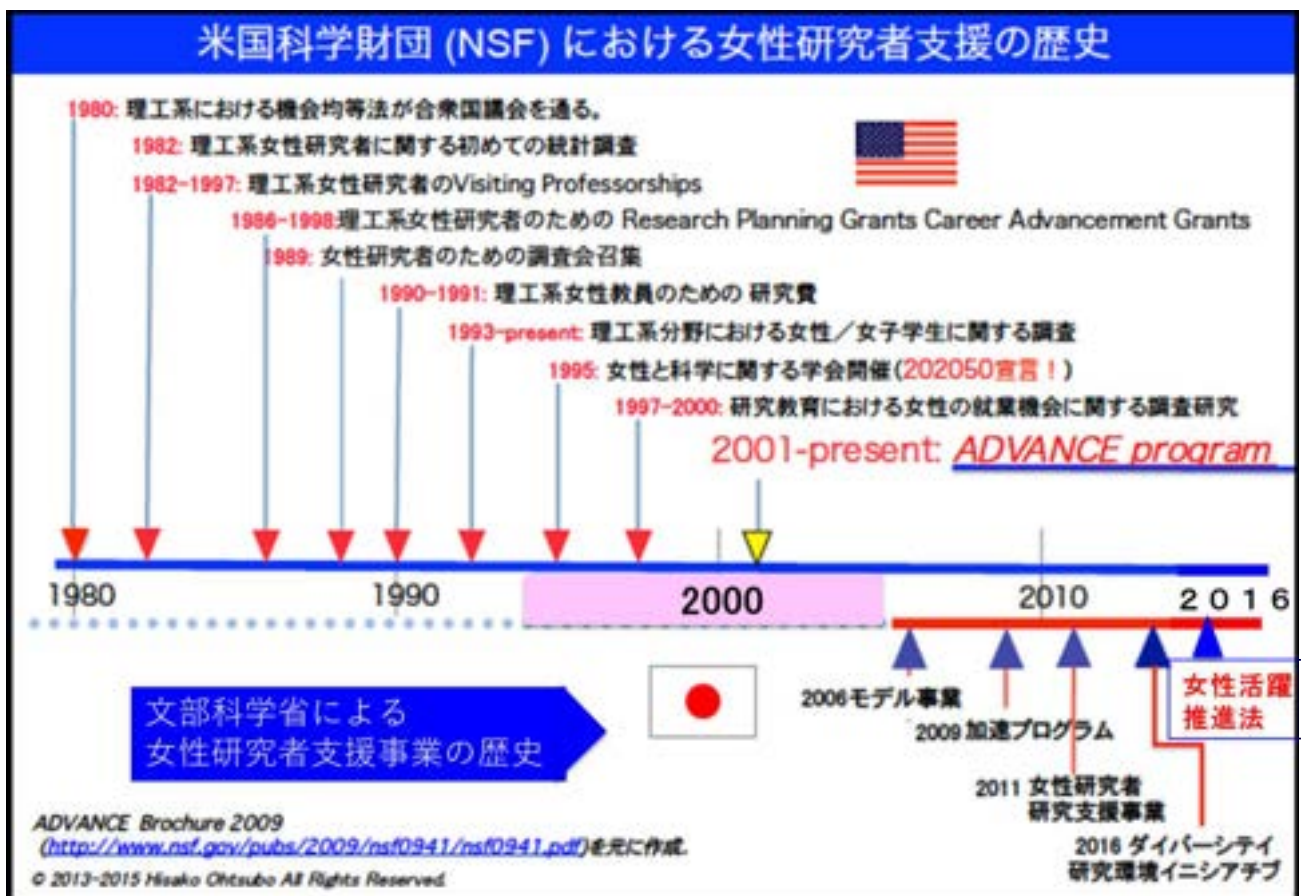
男女共同参画の今(1)



大坪久子氏は男女共同参画の推進に長年ご尽力され、最新の Unconscious bias の啓発に現在は精力的に取り組まれています。大坪氏より男女共同参画ご講演資料を頂戴しました。初回は日米比較と問題提起です。大坪氏は、東京大学で、動く遺伝子によるゲノム動態とその進化の研究をされた後、日本大学を経て、日本大学薬学部薬学研究所上席研究員となられ、日々全国で講演をなさっています。

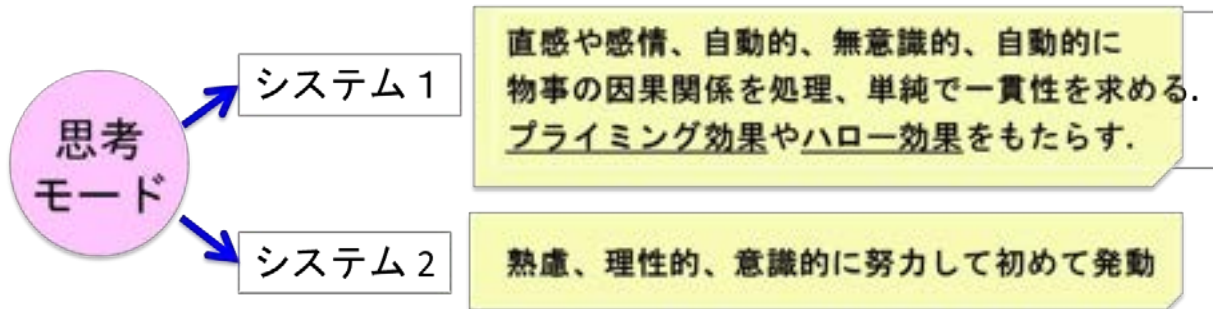
大坪久子先生から海の女性ネットワークへ(1)

日本の男女共同参画の活動の始まりは、アメリカと比較して遅かったのですが、自然科学系の学協会(現在は工学技術系も参加)からなる男女共同参画学協会連絡会が設立されて以来、活発な活動を展開しています。最近では国際比較による新たな課題も取り上げられています。一方、女性活躍法により女性登用への意識は変わってきていますが、実感はまだありません。また、欧米でも男女共同参画の課題は多く残っていると、国際学術誌 Oceanography の海洋学女性研究者特集号(2014年)では指摘しています。では、なぜ男女共同参画がなかなか進まないのか。その理由は、世界共通にある無意識のバイアスにあると見出されています。大坪先生のご厚意で提供いただいたスライドを順次掲載し、Unconscious Bias について説明していきます。(窪川)



無意識のバイアス – Unconscious Bias – は比較的新しい概念

ヒトの脳の中には二つのシステムが存在している



私たちの判断は、システム1に大きく左右される

我々の脳は、一瞬のうち1100万ビットの情報を受信、意識的には、そのうちの40ビットしか処理していない。受け取る情報の99.99996%は処理できず、無意識のうちにスルーしてしまっている

ダニエル・カーネマン (Daniel Kahneman)
邦訳：ファスト&スロー(上,下)–(ハヤカワ・ノンフィクション文庫)

馬に乗る人・乗せる人、「乗ったらおけるな、突っ走れー!!」



女性が活躍する企業には必ず名伯楽がいる!!

平成26年度「つくば女性研究者支援協議会」シンポジウム 辻智氏(日本IBM株)より話題提供

© 2013-2017 Hisako Ohtsubo All Rights Reserved

次号をお楽しみに。



海と私



「海の女性ネットワーク」参加者の海への思いと経験を伝えるコーナーです。



北里大学海洋生命科学部

阿見彌 典子

「海と私」の繋がりはとても強いと感じている。子供の頃から海は遊び場であり、特別な意識はしていなかったが海への興味は強かったようで、結果的に北里大学水産学部（現 海洋生命科学部）に進学した。そしていつの間にか海は遊び場としてだけではなく、研究のフィールドとなっていた。

私は現在、北里大学海洋生命科学部の教員として、魚類を対象に研究を行なっている。多くの方たちに支えられながら、毎日とにかく楽しく研究をしている。研究の始まりは、魚類の食欲調節機構に関する生理学的研究であった。当初は研究室内での実験がほとんどであったが、研究を続けている中で魚類の生態にも強く惹かれるようになり、現在では漁船や調査船にも同乗させていただき、新しい経験にドキドキしっぱなしである。そして、たくさんの人たちとの出会いがあり、なんて刺激的な世界なのだろうと感じる。こんなに楽しいことに巡り合えた私は幸せ！と感じる毎日である。また、海は楽しさだけではなく、人と繋がるきっかけや、そこから学ぶ機会を私に与えてくれる。だからこそ、私と同じように海や水圏生物に惹かれて入学してくる学生たちには、講義や研究を通して、海洋生命科学の面白さをもっともっと知ってほしい。研究室に入って来た学生たちが、自身の研究にどっぷりはまっている様子を見るたびに、何とも言えない嬉しさを感じるのと同時に、刺激も受ける。このように海は、私にたくさんのものを与えてくれている。

そしてもう一つ、「海と私」を強く結びつけている出来事がある。それは東日本大震災である。この原稿を書いているのは2018年3月10日、明日で震災から7年が経とうとしている。北里大学海洋生命科学部のキャンパスは、岩手県大船渡市三陸町にあった。学生として8年を過ごし、そして教員になって1年目が終わろうとしていた2011年3月11日に、東日本大震災は起きた。詳細はみなさんご存知の通りだが、震災の経験は「海と私」の繋がりをさらに強固なものとしたと感じている。震災後、海洋生命科学部のキャンパスは余儀なく神奈川県相模原市に移転したが、岩手県との繋がりは決して切れてはいない。それは研究面だけではなく、人との繋がりも含めてである。私は、学生時代から三陸町の方々に家族のように支えていただき、そして三陸の海で研究人生を始めるきっかけを得ることができた。だからこそ、海に関する研究を続けることが、三陸への恩返しのように感じている。これからも未来を担う若い世代の人たちに、たくさんの想いを込めて「海」を伝えていきたい。



岩手県大槌湾でのイカナゴ属魚類採集の様子



研究室で海に興味を抱く学生たちと和んでる様子



1. 海との出会い

父の誕生日が7月20日「海の日」だったこともあり、わが家の海への思いは、ちょっとした晴れがましさを伴っていました。しかしながら、海洋や海洋生物を、学問や仕事の対象として考えたことはなく、そういう分野があることさえ知らないまま育ったと言っていいでしょう。

私が初めて水泳を習ったのも、海でした。小学生の頃、今は高層マンションで覆われている兵庫県芦屋の浜で、毎夏「水練学校」というものが開催されており、友人と共に参加しました。海の中の10メートルってなんて遠いだろう、と思ったのを覚えています。

海の映画も印象的でした。「チコと鮫」という映画、ご存知でしょうか？タヒチの少年が鮫と友だちとなり、少年が海に深く潜って鮫と一緒に泳ぐシーンは目に焼き付いています。

2. 海の仕事との出会い

海の仕事との出会いは、1本の電話からでした。コミュニケーション分野で小さな会社を営んでいた私に、同時通訳者で年上の従姉妹から「マルタに本部のある International Ocean Institute (IOI)という海に関する NGO が、富山県高岡市で『海に平和を(Pacem in Maribus)』という国際会議を開催する。ついでに、会議のオーガナイズを、貴女の会社で引き受けてもらいたい。」と。1993年の早春のことでした。

まだメールが一般的でない時代、海外からの参加者約80名の多くが開発途上国からで、FAXを送っても本当に届いているか国際電話で確認する、という状態。参加者が無事に高岡に集結し、華やかに会議が始まった瞬間には嬉しくて涙が出ました。

その間、IOI(国際海洋研究所)の創設者で「海洋の母」と呼ばれたボルゲーゼ女史(Elisabeth Mann Borgese)と頻りに電話で話すうち、その明るく前向きで暖かい人柄にすっかり魅了されました。そして、会議に参加された IOI のメンバーたちが真剣かつ穏やかに「海の平和」「人類の共同財産としての海洋」を語られている姿に感動を覚えました。

そして、1998年には自分の会社を経営しながら、IOIの日本支部長を引き受けることに。時間を有効に使うために事務所の一角に住みこむまでになりました。海は全くの専門外でしたので、まずは、IOIカナダ支部で毎年初夏に開かれている10週間のトレーニングコース(UNCLOS+Agenda21)を履修、海洋政策について学ぶことから始めました。

国際海洋研究所(IOI)日本支部がかかわった主な活動としては、

- －南インド沿岸域の貧しい村の女性たちの自立を支援する”Eco-Village Project”
- －富山県氷見市の定置網のコスタリカへの紹介
- －海洋に関する国際会議 Independent World Commission on the Oceans の開催
- －水フォーラムでのセッション Dialogue between the Ocean and the Fresh Water の開催
- －UNITAR 広島 の Sea and the Human Security 会議

などがあげられます。

2009年頃からは、海洋政策研究財団（現笹川平和財団海洋政策研究所）のプロジェクトに参加、海洋基本法の第25条に明記されながら、実践の進め方がわかりにくい、と言われていた沿岸域総合管理「海を活かしたまちづくり」を三重県志摩市など、全国7カ所のモデルサイトで展開してきました。



（写真は、韓国と日本の国境付近へ船を漕ぎ出し、2人のアーティスト出会う A Picnic on the Ocean という作品。これも IOI のプロジェクトとして実施しました。）

今年はボルゲーゼさんの生誕100年にあたりますが、2月に彼女の著書 ”The Oceanic Circle”の翻訳が「海洋の環～人類の共同財産『海洋』のガバナンス～」として、笹川平和財団海洋政策研究所から出版され、宿題をひとつ終えた気持ちです。

これまで、海に導かれるように、素晴らしい偶然の出会いがあり、楽しく興味深く海とその周辺の方々とかかわることが出来ました。ボルゲーゼさんに言われた言葉を思い出します。「海は深くて『はまる』わよ」そして、「海は人と人を繋いでくれる」——これからもどのような出会いがあるか、楽しみです。



目次

序章

第1章 海からの展望：自然科学的視点

第2章 海からの展望：文化的視点

第3章 海からの展望：経済的視点

第4章 海からの展望：法的視点

第5章 海からの展望：制度的視点

第6章 提言と結論

付属書 21世紀のための国際海底機構



「海」という漢字には「母」が入っている。漢和辞典によれば「每」は意味のうえで「母」との関係を強くにじませるが、「カイ（海）」は「マイ（毎）」と音が似ているためにあてられた形声文字とある。しかし漢字の成立過程がどうあれ、じっさいに海の人々と接すると、そこに強い母性を感じることもある。取材先でのひとつの思い出話をしたい。

東日本大震災から3年たった2015年5月20日。京都大学の田中克先生に誘われ、シーカヤックで東北の牡鹿半島沖を北上する機会（東北海廻路）があった。その日、低気圧が急接近してきたのでやり過ごすために偶然上陸したのが、女川町の横浦という、ホヤの養殖が盛んな小さな漁港だった。

三陸のほかの浦々と同様に、浜の集落は津波にさらわれ、礎石しか残っていなかった。その浜に同年代の友達と散歩に来ていたのが木村キヨさん（当時81才）で、他の2人のおばあさんと海を見ながら、おしゃべりに興じていた。挨拶をして世間話をしたときに、キヨさんは「あとで仮設住宅に遊びにおいで」と言ってくれた。

夕方、風雨がとても強くなった。やむなくトイレを借りに、斜面の上のほうにあるキヨさんの仮設住宅を訪ねると、「こんな嵐の夜に女の子が外で寝るわけにはいかない。うちに泊まりなさい」といってくれた。突然上陸してきた身で、しかも仮設住宅に押しかけるなんて申し訳ないと思いながらもその言葉に甘えることにした。

夜、キヨさんのベッドのとなりに敷いた布団に入った私に、キヨさんはいろいろな話をしてくれた。若い頃のこと、子どものこと、夫とホヤの養殖をして、それを直接全国の料理屋にFAXで売って商売が繁盛したこと、震災の何年か前に立派な家を建てたが、津波で家財ごと失ったこと、再建に向けて頑張っていた娘婿が震災の半年後にくも膜下出血で急死したこと、キヨさんの夫も震災一年後に亡くなったこと、ホヤの主要輸出先の韓国が原発事故を境に魚介類を受け入れなくなったので大打撃を受けていることなど、つぎつぎと話が湧き出てきた。

最後に、キヨさんは「では、これを飲んで寝まーす」とおどけるように言って一粒の導眠剤を飲み、電気を消した。しばらくすると静かな寝息が聞こえてきた。

私は、キヨさんのように海に暮らす人のやさしさと強さをいつまでも忘れないだろう。じつは種子島の海でも土地のおばあさんに親切にしてもらったが、それはまた別の機会に。私が「海には母がいる」と思う理由はこんなところにある。



泊めていただいた仮設住宅と下方に見える横浦漁港（2014年5月撮影筆者）



(1)海と関係してきた経験

おそらく人生で初めて海に行ったのは 2 歳頃ですが、記憶として残っているのは小学生の頃に海水浴場に行った記憶で、スイカ割りをしたとか、弟が迷子になったとか、「海の」というよりは、「海に関連する」記憶というものが残っています。

私の専門は水産に関っていますが、この専門に進むことになったのも「なんとなく」というのが一番しっくり来る気がしていて、明確な理由や目標があったわけではないなと感じています。強いて言うなら学部 3 年生の時に行った臨海実習が楽しかったからなのかもしれません。(東京大学の学部学科についてはややこしいのですが、私が研究室を選んだのは学部 3 年生の終わり頃で、その時から専門が水産になりました。)

院生になってからは海に行く機会が増えてきて、漁師さんに船に乗せていただくこともあり、どんどん海が好きになりました。湖や川に行く機会もありましたが、海は波が生きている感じがして、広くて永遠とも思えるところが湖や川とは違うなと感じています。

海は魚の住む場所であり、魚が育てられる場所でもあります。ただ海を見るわけではなく、漁業の現場を見学しているときは、「営み」という言葉が頭に浮かんできます。水産を勉強していると、「自然としてある海」と「営みの場としてある海」のどちらも感じる事ができて面白いです。

(2)おすすめの本と進路選択のアドバイス (中高生向け)



写真出典：Amazon

書名：「マリ IT の出帆 舟に乗り 海に出た 研究者のお話」

著者：和田雅昭+マリンスターズ

出版：公立ほこだて未来大学出版会

ISBN：978-4-7649-5551-6

定価：本体 1800 円+税

私がおすすめるのは、公立ほこだて未来大学の和田先生が書かれた「マリ IT」に関する本です。マリ IT とは簡潔に言うと、水産海洋分野への IT 技術の利用です。世間では AI や IoT が注目を集めていますが、漁業においても新しい IT 技術の導入は注目を浴びています。内容は和田先生の経験談で、自己紹介に始まり、これまでに手掛けてきた、というか漁師さんと一緒につくりあげてきたとも言える内容が語られています。この本は中高生向けに書かれた本で、専門的な知識がなくても読めるように書かれており、写真や挿絵も多くあります。漁業について、漁業における IT の使用について、好奇心の新しい扉を開くことは、将来海に関わらない人にとっても有益なことだと思うので、時間のある時にでも、ぜひ読んでみてください。

また個人的には、この本は進路選択を考えるときにも役立つと思っています。海というと「自然」という感じがして、中々情報系のアプローチというのは最初には出てこないのではないかと思います。けれど海に関するの、生物学や環境学はもちろん、漁村に関するような社会系のアプローチもあるし、漁船のエンジンに関するような機械系のアプローチも、和田先生のような情報系のアプローチもあります。色々な切り口があるというのは海だけに限った話ではありません。好きなトピックはあるけど、そのトピックに関すると思われる教科があまり好きでない場合、好きではないけどその方向に進むという選択肢もありますが、別の分野からのアプローチを探すという選択肢もあるということは知っておいて損はありません。この本はお値段が少し高めなので、読みたいと思った中高生の方は学校の図書館に置いてもらえるように頼むという手を使うのもアリだと思います。

(3) タイの水族館

実は今、私は海洋アライアンスのインターンシップでタイにいますので、タイで私が行った2つの水族館について紹介したいと思います。

1つ目はサイアムパラゴンというショッピングモールの地下にある Sea Life Bangkok Ocean World という水族館です。入場料は少し高めですが、旅行会社で事前にチケットを購入することで少し安く入場することができます。私は時間の都合もあり、体験しませんでした。高いチケットを購入すれば水族館の裏側見学や水槽のところでボートに乗ることができます。この水族館の変わったところは鬼の像が入っている水槽があることです。特にその像に何か効果があったりするわけではありませんが、中々ない光景だと思うので、見て面白いと思います。

2つ目はカセサート大学水産学部の近くにある大学の水族館です。こちらはお値段が安く、ほとんどタダ同然で入場することができます。先ほどの水族館のような観光向けの仕掛けなどはありませんが、(私が)思っていたより魚の種類も多く、人も少ないので、ゆっくりと見ることができます。ここからバスで10分程度の場所(運賃30円以内です)にチャトゥチャックマーケットというとても大きくて有名なマーケット(土日のみ)があるので、そのマーケットに訪れた際に訪問するのが効率的だと思います。

タイには他にもリゾートとして有名なパタヤなどに水族館があるようです。外国に観光に来て、わざわざ水族館に行かれる方は少ないかと思いますが、少し観光の予定が空いてしまったりしたときに、もしよければ行かれてみてください。

(4)好きな海を表す写真

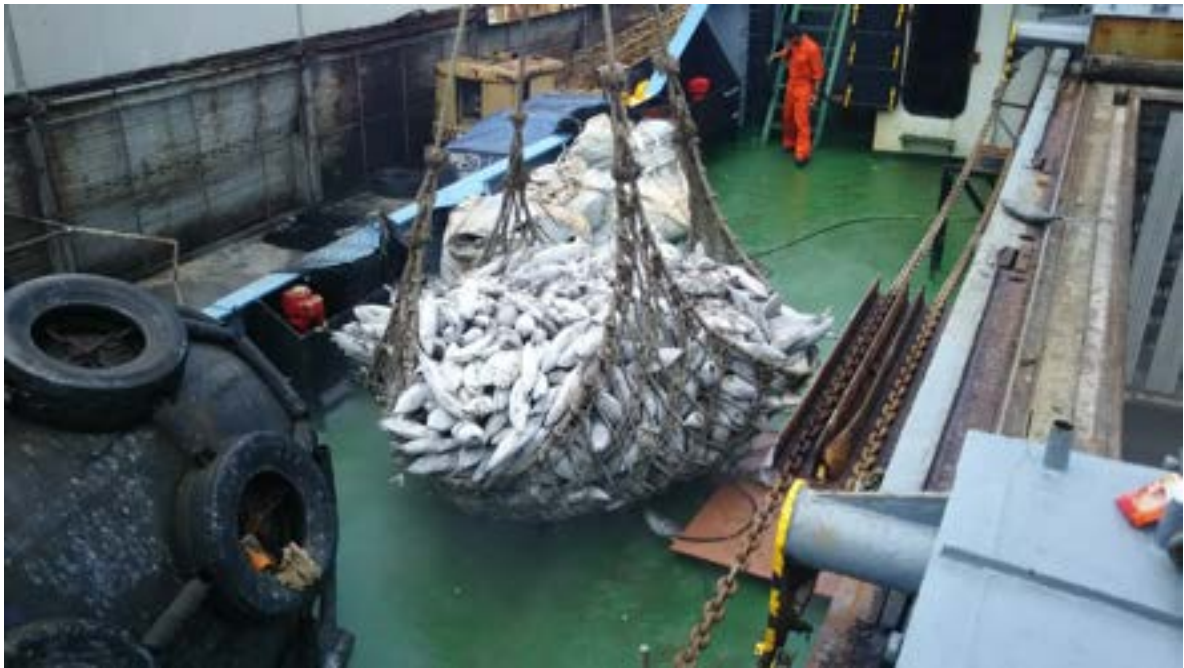
これは一体どこの海でしょうかとクイズを出したくなるような写真です。色々な写真の中からどの写真を選ぼうかと悩んだのですが、1枚目はこの「海の他にほとんど何も写っていない写真」を選びました。人や物が写っている写真は一瞬で思い出がよみがえり、見て楽しいですが、見ていて一番落ち着くのはこの写真です。またこの写真からもじわじわと思い出はよみがえってきます。(場所：宮城県石巻市狐崎浜 筆者撮影)

2枚目は1枚目とは対照的とも言える写真だと思います。こんなにも多くの魚が海の中にはいて、こうやって獲られた魚を私たちは食べているんだというのが感じられる写真です。ちなみにこの魚はツナ缶になります。(場所：タイの漁港 筆者撮影)

(次ページに写真)



(場所：宮城県石巻市狐崎浜 筆者撮影)



(場所：タイの漁港 筆者撮影)



(海の体験)

水産の研究をしていて、砂丘とカニで有名な鳥取県の出身であるという話をすると、私が海辺で育ったかのように思われるが、実家はどちらかというと山の方に近く、海からは車で30分以上も離れている。それでも、子供の頃から毎年海水浴に行き、神話「因幡の白うさぎ」で有名な白兔海岸や、浦富海岸に家族とドライブに出かけた記憶がある。だからなのか、今でも海辺に行くのがとても好き。泳ぐのは嫌いだし苦手なので、マリンスポーツもしなければ、海水浴に行きたいとも思わないが、海辺の散歩が大好き。景色を眺めてさらさらという波の音を聞いていると、心が安らぐ。ダイナミックなザッバーンという波の時は、パワーがみなぎってくるような、そんな気持ちになる。

水産の研究といっても、私の専門は資源経済学なので、海の生き物のことをよく知っているわけではない。研究対象は、資源を利用・消費している「人」だ。しかも、この「人」が研究対象になったのもここ数年のことで、それまではひたすら机とコンピュータに向かって資源経済の理論モデルと格闘してばかりいた。博士論文を書く中で、モデルを作っては破り、作っては破りを繰り返す中で、「海辺を散歩する」という行為は、癒しとポジティブ・マインド、そして時にはヒラメキを与えてくれた。そして今、ビルに囲まれた東京の生活の中でも、想像を膨らませればあの時の余韻に浸ることもできる。疲れた時には空想海辺散歩。

とはいえ、やはり実際に海辺に行くのは楽しい。研究対象が「漁業者」になった今、漁港を訪ねる機会が増えた。眠い目をこすりながら漁港へ出かけて行き、だんだん夜が明けていく様子は本当に清々しい。そして、一日中漁師と話をし、研究に役立てる（研究と全く関係していない話をしている方が長いような気もするが・・・）。いずれにせよ、漁師の話は、理論やデータの闇を照らす光であり、研究を続けるためのエネルギー源になっているような気がする。

(研究と海)

私は経済学で学位を取った。専門は資源経済学で、特に漁業資源の管理を専門としている。博士論文では、回遊資源である中西部太平洋のマグロの国際的な管理や、養殖が漁業の最適管理に与える影響、漁業管理の最適な時間的変遷を扱った。

東京大学の海洋アライアンスに就職してからは、「海洋の利用に関する合意形成手法の開発」プロジェクトのメンバーとして、海洋空間計画 (Marine Spatial Planning; MSP) に取り組んだ。MSP は、ステークホルダー参加と科学的な知見をもとに沿岸・海洋域の順応的管理を行う手法であり、世界各国で導入が進んでいる。私が所属するこのプロジェクトには、海洋物理、公共政策、水産政策、人間-環境学を専門とするメンバーが所属しており、それぞれの多様な目線で議論を重ね、「海洋利用に関する合意形成プロセスに係るガイドライン」を作成した。

これと同時並行して、日本の沿岸漁業の共同管理 (co-management) について研究を開始し、プール制共同操業 (漁業者が共同で操業し、その収入を均等に分配する制度) の効果の定量分析を中心に取り組んでいる。また、東京大学には海の社会学的な研究をしている面白い若手がたくさんいる。そんな彼らと一緒に「海の価値とは何か」という大きな課題について、楽しく愉快地に、そして時には真面目に議論をしている。刺激的な仲間のおかげで、研究の幅も広がったと思っている。

(オススメの本)

「海（福音館の科学シリーズ）」

福音館書店

ISBN-10: 4834002012

子供向けに書かれた絵本ですが、大人が読んでも面白いです。



小道の向こうには海がある（2013年筆者撮影）



イセエビ刺し網漁の船に乗せてもらった時の写真。こんな光景はなかなかみられない。とにかくカッコよかった。（2017年 筆者撮影）



(1)海との関係

幼稚園児頃から海好きの父に連れられて、夏は神奈川県海へ出かけていました。父との海での遊びはもっぱら磯遊びやスノーケリングで、網とバケツを持ち、沢山の生き物を捕まえ、帰宅後は図鑑で調べていました。溺れかけたり、足の裏に釘が刺さったりと苦い思い出もありますが、海は不思議な生物がいる、楽しい場所でした。お気に入りには、マハゼ、アメフラシ、ウニの殻でした。

高校生になって、進路を考えたとき、海を学問にできる大学があると発見し、東京海洋大学へ進学し、海洋環境を学びました。学生生活はちょっと寄り道もしましたが主に海に溢れた6年間でした。授業で磯場にいける、授業で釣りにいける、授業でダイビングができる、座学、解剖、乗船、フィールドワークを交えて、色々な方法で海を学びました。

(2)海と研究

大学で研究室を決めるとき、1年前に東日本大震災が起きた時期で、私は気仙沼湾で起きた重油流出事故の調査をすることになりました。そのときお世話になった先生がとても尊敬できる研究者であったこと、研究内容に使命感を持ったことから、大学院への進学を決めました。実際に気仙沼湾で漁船に乗り、採泥器を曳き、海底の泥を採取し、その中の油を分析するという日々のにめり込みました。何かを掘り進めること、研究が好きと気付き、将来もずっと海に関する研究がしたいと思い、現職に就いています。研究の舞台は海底の研究から、海上へと変わり、主に船用エンジンの排ガスを調べています。まわりには造船や機械を学んできた方が多く、日々新たに勉強することばかりです。海洋環境を学んだことを強みとして、船にも海にも役に立つ研究ができればと精進する毎日です。

「海と私」との関係は、遊び場から学問、研究対象へと変化し、現在に至ります。

(3)おすすめの本・映画

栗原康「河口・沿岸域の生態学とエコテクノロジー」(東海大学出版会)

干潟に熱中していたときにおすすめされた本です。人々が暮らしている場所により近い沿岸域を対象とした本で、生態学、環境学と詳しい説明があります。

「バーニング・オーシャン」 監督：ピーター・バーグ

2010年に起きたメキシコ湾原油流出事故を題材とした映画です。この事故は近年の油流出事故の中でも大きく、環境影響調査も精力的に実施され、多くの論文が書かれました。人災がテーマにあり、石油掘削のリグもかなりリアルに再現されているらしく、緊張感のある映画です。

(4)おすすめの場所

・川崎マリエン @〒210-0869 川崎市川崎区東扇島 38-1

最上階に展望台があり、港が近いので、船舶の往来も多く、長時間いても飽きない眺めです。工場地帯も見ることが出来ます。目下に自動車の輸出を専門とする船、PCC(Pure Car Carrier)の港があり、巨大な船に自動車が次々と吸い込まれていく姿を見ることができます。

・諫早湾 @長崎県

干潟の干拓事業で有名な場所です。近くの「むつごろう水族館」ではトビハゼやワラスボを見ることが出来ました。

(5)自分が好きな海を表す写真



写真1

空き缶に隠れていたギンポ

初めてダイビングしたときに練習として撮影した写真です。(館山にて、筆者撮影)



写真2

船用エンジン

母校の練習船の見学会で撮影した写真です。(豊海埠頭にて、筆者撮影)



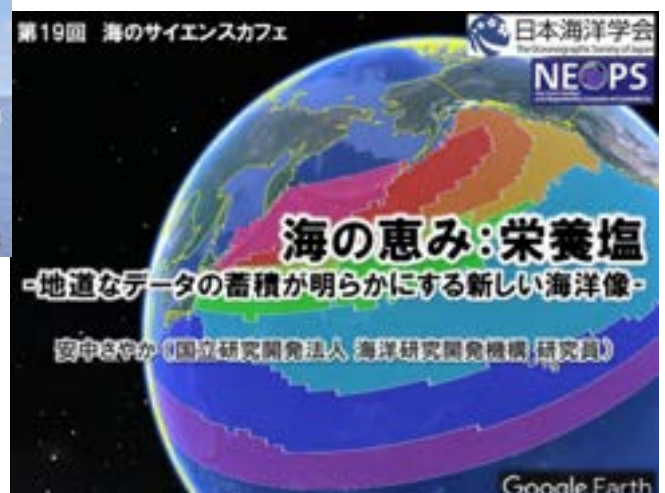
特に、海に思い入れがあった訳ではありません。子どもの頃、沖に流されたビーチボールを取りに足の立たないところまで行ってしまったり、沈没しつつあるフェリーで呆然と立ち尽くす修学旅行生の報道写真を見たりと、むしろ怖いイメージの方が強かったです。物理学への憧れと、地球環境問題への興味から、地球物理学を志し、気候変動の主役は海だと聞いて、海洋物理学の研究室に所属した次第です。そして、その時その場で、おもしろそうに感じた進路を選んできた結果、たまたま職がつながり、今の私があります。

確かに、女性の少ない環境です。でも、少ないからこそ、人に覚えてもらいやすいし、こうあるべきなどの固定観念もなく自分が思うがまま歩んできたように思います。ただ、私が開拓者などでは決してなく、少ないながらも偉大な諸先輩方がいらっしゃり、それらの方々のお陰でできた制度を使わせていただいているのも事実です。男女共同参画を自ら引っ張る心意気・覚悟はできていませんが、自分の受けてきたご恩を、なんらかの形で返さなくてはとは思っています。

アウトリーチに関わることがあります。海の流れを物理の法則で説明できること、海の成分を測るとその水の歴史がわかること、海にはたくさんの不思議があります。海の研究をしている自分だからこそ、そんな海の魅力を臨場感を持って伝えられるのだと思うようにしています。海は山よりも美しいだとか、海を知ることは重力波を知ることよりも大事だとかではなく、海への興味が、理科への関心、さらには学ぶことへの動機付けになってくれるといいなと思っています。



何かに打ち込んでいるの方々とお話するのは、刺激的で勉強になります。この会でのつながりが、より実りある研究生活、そしてより豊かな世の中につながっていければと楽しみにしています。





海は、幼少のころは、夏休みに父の車で数時間かけてゆく、一大イベントのひとつであった。楽しい時間であったが、それ以上の強い思い入れはなかった。転機は、中学生の時。父の転勤で、とある海辺の町に引越した。授業の一部を海辺で過ごしたり、休日に散歩に出かけたり、生活の中に海が存在するようになった。海にいる時間が長くなり、海の近くの暮らしは良いなあという漠然とした思いと、もう少し海を知りたいという緩やかな興味から東海大学海洋学部、専攻は海洋工学科に進んだ。観測船望星丸での海洋実習、調査船北斗、南十字での海上実験、海上でデータを取得して、海を知ることは非常に貴重な経験であった。海の近くで仕事したいとの思いも強くなった。

学究的な興味というよりは、何を題材にしても、計測方法を手作りで道具立てから考える恩師のスタイルに惹かれて、水中音響学の研究室を選択した。音響技術を駆使して海を測る研究は、とても面白かった。もう少し続きをやりたいと思いつけて今に至るが、大学&大学院時代の9年間、海の近くに住み、海を学び、海で遊び、自身のベースになっている。

現在の主たる研究テーマは、水中音響ビデオカメラの開発であり、10年ほど取り組んでいる。この機器は音波を使うことで、濁った水中において三次元リアルタイム表示の音響映像を取得でき、人の視覚に近い視認ができる、という優れものである。これができると、水中土木工事の効率性向上だけでなく、潜水士の安全性も格段に上がると言われており、成果普及にも携わっている。

この開発研究には幸いにして大きな予算がつき、自身が手を動かして研究らしいことをする時間は圧倒的に減ったことはジレンマであるが、その一方で多くの人々や企業と繋がり、自身や仲間が関わる開発品を実社会で使われるよう後押ししたり、自身の立ち位置大きく変わってきていることを、今、これを書きながら改めて感じている。

ところで、最近は仕事のボリュームも増し、仕事のオンオフがより大切だと感じている。オフの日も海辺にすることが多く、波乗りなどの海仲間や旧友と出かけたり、娘と愛犬の散歩を楽しんでいる。良い仲間と囲まれる時間は、心身のリフレッシュと新たな着想を得る良い機会と感じている。

後進のみなさんに向けて。やりたいという思いを大切にすること、チャンスには挑戦すること、周囲の人との繋がりを大切にすること、プライベートの時間を大切にすること。皆さんにとって、仕事を通じた社会とのかかわりが、より良い人生の一部になることを願っている。

(次ページに写真)



写真1、2018年1月1日、日本で一番早い日の出を拝む。23日間の調査航海で南鳥島界限にて。



写真2、愛犬と散歩中。自身のリフレッシュには大切なひととき。



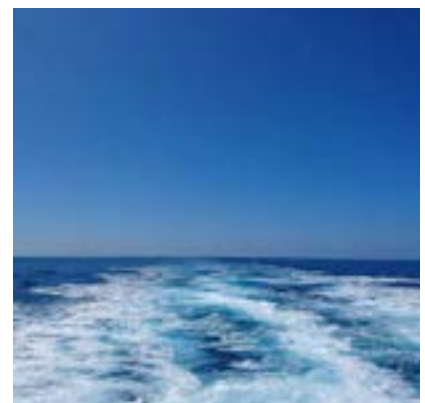
初めて海上観測を行ったのは、学部2年生のときでした。私の出身校である三重大学生物資源学部は練習船「勢水丸」を所有しており、実習として乗船する機会があります。三重県松阪港から出港した船は、伊勢湾を航行し、さらに進むと黒潮へと到達します。黒潮内外では、海面水温が大きく違います。船のセンサーで海面水温を観測しているので数字で見ているだけでも楽しいのですが、実際に船の甲板に出ているとその温度変化を肌で感じることができます。そのことがきっかけとなり、海洋上の気象について興味を持ち始めました。そこから、海上での気象観測をするため、勢水丸だけでなくいろんな機関の船に乗らせていただき、日本周辺の様々な海域に行きました。また、乗船の際には海洋の研究者の方も多く同乗されるので、気象観測だけでなく様々な海洋観測を経験する機会にも恵まれました。海洋観測にも参加させていただく中で、数千mの深さの海水の冷たさや海底の泥の中に住む生物の多さなど、たくさんの発見や驚きがありました。という話をすると、船酔いしないの？とよく聞かれます。実際のところ、私はとても乗り物に弱く、船の上では酔い止めの薬が手放せなかつたりします。でも、そんな苦しみよりも、海上での貴重な体験ができることが本当に楽しいです。

現在の私は、『亜熱帯域から亜寒帯域への海水の流れ』や『海洋中の微量栄養素の循環』をターゲットに研究をしています。気象学から海洋学へ研究の場を少しシフトした形になります。船での経験を通して感じた“これまで海洋上の気象に注目してきたけど、海洋観測データを解析して海の中のことも見てみたい”という気持ちがきっかけの一つになったと思っています。また、観測での繋がりのおかげで出会えた海洋学の研究者・学生といろいろな話をしたことが、海洋学への興味を持つもう一つのきっかけになったようにも感じています。

自身の経験を通して、まだ海に出たことがない人にも海に触れる経験をしてほしいと本当に思いますし、また、海の魅力や面白さを広く伝えられるような研究がしていきたいです。



三重大学練習船「勢水丸」



青い海と青い空



私の出身は埼玉県です。海のない県で育った私は小さい時から海への憧れが強く魚や海の生き物が大好きでした。

中学生の時からもっと詳しく海や魚のことについて学びたいと思うようになり、高校進学に悩んでいた時に祖父の家のある新潟県に海洋高校というものがあると知り、私はすぐに入学を決めました。私にとってこの海洋高校への進学という決断は今の私の潜水士という道を決めるとても重要な分岐点だったなと思います。

海洋高校に入学して私は初めて実際に自分の目で海の中の世界を見ました。今まで水面までしか見てこなかった海の中には陸の世界とは何もかもが違う別世界が広がっていて水中から見上げた眩しい太陽や見渡す限りの青い海、初めて間近に見た大好きな海の生き物にとっても感動しもっとたくさんの海を知りたい、見てみたいと思うようになりました。そして私は海洋高校で潜水士という職業を知りました。

大好きな海の中で海のために働けるのは潜水業ならではの魅力だなと思い潜水士になることを決意しました。

海の中は潮の流れが速かったり波が高かったり真っ暗の海だったり大変なことも多いですがそれ以上に毎日たくさんのことを学ばせてくれます。思い通りにならないことやうまくいかないことが多い中で今の自分にできることは何か考えたり、状況に合わせたとっさの判断力だったり自分に足りないものを日々教えてくれます。

そんな日々を過ごしながら私は一年間仕事を通して日本全国の様々な海で働く人たちと出会いました。方言の強い漁師さんや観光船の船員さんだったり魚の生態や生息環境を調べる研究員の方々など出会い、どの人も海が大好きで働く姿はととても輝いて見えました。そして私もそんな人たちの働く海を少しでも守ることができているんじゃないかと思うと嬉しく思います。

以前一緒にお仕事をした漁師さんに「大越さんは海に潜っている時が一番生き生きしているよね」と言われたときに私が本当に一番自分らしく輝ける場所は海なんだと気付きました。そんな自分が一番大好きで輝ける海を私は潜水士としてこれからも守り続けていきたいと思います。時には「女性の潜水士なのか！」と驚かれることもあります胸を張って「はいそうです！」と答えられるようにまだまだ頑張っていきたいなと思います。

そしてこれから先もっともっと一緒に海で輝いてける女性が増えていったら嬉しいなと思います。



編集後記

船出しました。海のネットワークの参加者の考えを羅針盤に反映させながら進めていきます。創刊号が出る頃は、桜の開花が気になる3月下旬です。開花日は、地域によって異なり、桜の種類や木がある場所によっても違ってきます。勤務先近くの上野公園にあるしだれ桜は早くも満開で、多くの人々が集まってきました。2週間後には、それがソメイヨシノに変わるでしょう。私たち、海に関わる女性たちも多様性を大事にして、海と向き合っていくことになります。この冊子が、海の女性ネットワークの広がり役立ち、海も女性も元気なる発信を続けていかれたらと思います。これからもお願い申し上げます。(kk)

次号予告

「海の女性ネットワーク」Vol.2は、5月下旬頃の予定です。
予約は、oceanwomen.jp@gmail.com で受付けています。

目次 (予定)

はじめに

第1回 Web 会議 (2018年3月19日開催) 報告

海とはじめての女性 (2)

男女共同参画の今 (2)

海と私

木戸ゆかり

窪川かおる

島下由加

高橋洋子

西川 悠

中田 薫

他

編集後記・次号予告



「海の女性ネットワーク」の問合せ先

事務局メール oceanwomen.jp@gmail.com

発行日 2018年3月20日
改訂 2023年4月（URL追加）
発行者 海の女性ネットワーク 編集 窪川かおる

連絡先 oceanwomen.jp@gmail.com
URL <https://womenforoneocean.com>
印刷 港北出版印刷（株）東京都渋谷区渋谷 2-7-7
表紙デザイン 岸 和泉

東京大学海洋アライアンス 2017 年度前期イニシャティブ「海洋分野で活躍する女性のネットワーク構築のための調査研究－女性の力を海に活かすために－」の活動で作成しました。また日本財団助成によります。